

## 英国の大学におけるビジネススクールの現状 - リーズ大学とランカスター大学を中心とした概観

岩間俊彦

小論では、英国の大学におけるビジネススクールに関する現状を、ふたつの大学の事例にそくして概略的に紹介する。英国大学のビジネススクールは、英国内の学生だけでなく海外からの留学生を多く獲得することに成功しているケースがしばしば観察される。また、後述する政府の制度的枠組みのもと、英国大学のビジネススクールは大学間において厳しい競争に直面しており、他大学に比して競争力の確保という点でも興味深い題材を提供するように思われる。筆者は2001年9月にリーズ大学 University of Leeds とランカスター大学 Lancaster University のビジネススクールを訪問する機会を得た<sup>1</sup>。その際、前者では学部長 dean であるアンドリュー・ロック教授 Professor Andrew Lock に対して、後者では経済学科長 Head of Economics であるモーリス・カービイ教授 Professor Maurice Kirby に対して、ビジネススクールの現状と課題についてインタビューすることができた<sup>2</sup>。インタビュー内容は、現時点におけるビジネススクールの成功点、その背景、そして今後の展望といった点について回答をいただいた。以下、両氏の回答と筆者の観察をもとにふたつのスクールの現状に関して検討した上で、そこから導き出される論点を提示したい。

現在、イングランドの大学<sup>3</sup>は、大学財政審議会 University Funding Council をもとにした研究調査評価執行会 Research Assessment exercise によって、教育ならびに研究に関して厳格な評価を定期的に受けている。この執行会の評価は、大学の運営に影響を与えるだけでなく、学生の大学選択の重要な指標ともなっている。さらに、英国の代表的な経済新聞『フィナンシャルタイムズ Financial Times』や高級紙『タイムズ Times』も研究・教育・大学設備・学生の就職状況といった指標を独自に作成し学部のランク付けを行なっている。英国の大学は、政府だけでなく、マスメディアによる教育・研究・サービスに関する評価にさらされているのである。

---

<sup>1</sup> われわれが英国大学の「ビジネススクール」と呼称する場合、大学によって名称が異なる場合がある。たとえば、筆者が訪問したリーズ大学のビジネススクールは Leeds University Business School、ランカスター大学は Lancaster University Management School と呼称されている。ふたつのスクールについてはホームページの情報も参照した。リーズ大学は <http://www.leeds.ac.uk/lubs/>、ランカスター大学は <http://www.lums.lancs.ac.uk/> (2002年6月末日確認)。

<sup>2</sup> ランカスター大学のインタビューに際しては、リーズ大学歴史学科カトリーナ・ハニーマン博士 Dr Katrina Honeyman とランカスター大学のメリー・ローズ博士 Dr Mary Rose にご尽力をいただいた。記して謝意を表したい。

<sup>3</sup> スコットランドの大学は異なった評価制度のもとにある。

研究調査評価執行会は1996年と2001年に評価5を最上として、以下1まで、学問分野ごとに評価を行なっている。ビジネススクールの分野ではランカスター大学は1996年において5\*(評価5の中でも、特に研究分野で秀でているスクールは\*という記号がつく)、つづく2001年も5\*であった。リーズ大学は、1996年において評価4であり、2001年には5に上昇した。筆者がふたつのスクールを訪れた時点では2001年の評価は公表されていなかったが、ロック氏もカービー氏とともに2001年の評価結果に自信をもつとともにその重要性を繰り返しといていた。ロック氏は『フィナンシャルタイムズ』の評価もスクールの運営に重要な影響を及ぼすことを強調していたが、両大学のスクールとも、研究調査評価執行会の評価はスクールの運営を左右する最も重要な指標であり、執行会の審査で高い評価を獲得することがスクールにとっての中核的戦略であると考えられる。

ロック氏によると、リーズ大学は2001年の評価においてトップランクの評価を得るために大規模な組織の再構成をおこなってきた。たとえば、国際的経営や金融といった特定分野を中核に位置付け教育内容を再検討すること、(構成員の見直しを含む)スタッフの充実、設備の充実、企業との協力関係の強化、中国・台湾・インド等の大学への積極的な働きかけ等である。筆者も1997年の春から2001年の春にかけてリーズ大学のビジネススクールと歴史学科に大学院生として所属していたが、2001年9月までにその設備の充実ぶり、留学生の増加、スタッフの再構成、そして、提供される教育プログラムの見直しは急激なものであったと断言できる。これらの組織の再構成は、先端的な科学技術等を駆使した企業との連携を軸にしたようなものではなかった。むしろ、英国や英国への留学を希望する学生の動向や欧米企業のニーズに対応するMBAプログラム等を充実することとそれを支える環境の充実を目指していた。例えば、MBA取得においても特定の分野を重点的に学ぶコースの設定やそれを可能にする選択科目の充実があげられる。また、社会人の特別コース executive MBA course を設定し、通常のMBAのコースよりもさらに充実した教育環境を提供することによって欧州の有力企業の信頼をかちとることも特色としてあげられる。

ランカスター大学では、研究調査評価執行会の評価にあらわれるように、1996年の時点で英国内の大学でもトップランクに位置するビジネススクールであった。ランカスター大学においてもMBAプログラムの充実等を通じて、英国や海外からの学生をひきつけ、また英国を含む欧州の企業との連携を強化するといったことは非常に重要な戦略である。しかしながら、より注目すべきは、このスクールがビジネス分野の教員だけでなくスクール内の経済学や(経営史を含む)経済史のスタッフと共に研究機関としてのビジネススクールの機能強化を目指してきたという点であろう。ランカスターのビジネススクールはビジネス教育の拠点という観点だけでなく、企業との連携を強化し研究機関の拠点として自らのスクールを位置付けることや、(研究を目的とした博士課程の大学院生を含む)学生のための教育機関を目指しているのである。このような戦略の背景

には、ランカスターの基幹産業である工業が衰退したため、教育と研究の拠点としてのランカスター大学の繁栄を基礎に地域社会が形成されているという事情もあろう。また、カービー氏によれば、各分野の教員が相互に積極的にコミュニケーションをとり、ビジネススクールの戦略を理解し共同で実現しようとする意識がスタッフの間で強いということも興味深い指摘であった。

小論を閉じるにあたり、リーズ大学とランカスター大学のビジネススクールの事例を参照しつつ、日本の大学におけるビジネススクールの方向性に関してふたつの論点を提出したい。第一に、これからビジネススクールの設立とその発展を目指す組織は、入学を希望する学生が何を求めているかという点や、後発のビジネススクールはそれが位置する経済社会においていかなるものを求められているのかという点を冷静に分析する必要がある。リーズ大学の事例は後発のビジネススクールがいかに発展してきたかという点で示唆的である。リーズ大学では、英国における経済社会の要請を教育プログラムに的確に反映させ、そのためのスタッフの充実と設備の拡充にあててきたのである。ランカスター大学も厳しい評価の競争の中で、教育と研究両面においてその充実を常に目指すことによって1996年と2001年の評価は英国内で最高水準であり国際的にも認知度をたかめていった。これはランカスター大学の中核スタッフが、スクールをとりまく状況を理解し適切な運営を行いながらスクールの競争力を維持していたと考えるべきであろう。

第二に、ビジネススクールの戦略は、ひとつの絶対的な成功モデルを設定した上で組織を改変し運営するというような方向は避けるべきである。リーズ大学とランカスター大学はともに、2001年の研究調査評価執行会によって高い評価を得た。しかしながら、前者は競争力を生み出すようなスクールとなるべく、カリキュラム・スタッフ・設備等の大幅な再構成を行なった。他方で、後者は、高い評価を維持すべくスタッフ・設備・情報といった資源を最大限いかせる組織として構築し、常にスクールをとりまく経済社会の環境にそくして自己の組織を改良していった。ロック氏によれば、ビジネススクールの成功は、われわれをとりまく市場の要請にこたえるだけでなく、経済社会においてあらたな価値の創造を行なうような存在を目指すことにかかっているという。リーズ大学やランカスター大学の例が示すように、日本のビジネススクールも各々がかかえる制度的背景をもとに、利用可能な資源を有効活用し、また、それを拡大することを目指しつつ、我々をとりまく経済社会の動向にそくして独自の戦略を確定しそれを実行することが求められているように思われる。